

科学化

Research

6

勇気ある挑戦：カイロの研究

Chiropractic research gained momentum in 1975 when the U.S. National Institutes of Health held the first conference on the Research Status of Spinal Manipulative Therapy. As early as 1980, the Japanese held the first scientific chiropractic symposium in Nagoya. Dr. Fujio Itoh, a young orthopedist at Nagoya University School of Medicine, was instrumental in making this symposium happen.

名古屋で初のカイロプラクティック学会 1980

The First Scientific Chiropractic Symposium was held in Nagoya in Japan

1980年11月2、3日の両日、名古屋大学医学部で、日本カイロプラクティック学会第1回学術大会が開かれた。テーマは「学と術の統一」。学会会長には高木健太郎元名古屋市大学長、大会委員長は名古屋大学理学療法部副部長の伊藤不二夫氏。

日本で初のカイロの学会。しかも国立大学医学部の講堂で医学界の重鎮を大勢招待しての学会に、全国のカイロ関係者は流派を越えて多数参加した。

伊藤大会委員長は「薬物、手術療法がやや過剰医療となっている今日、手技療法の重要性・効果・適応範囲を明確にすることはきわめて大切な事です。カイロを中心とした多くの協会が日本にあり、教育やセミナーを通じてその内容向上に努力がなされております。今後さらにこれらの努力が発展する事が強く望まれています。一方で強調されるべき課題として、個々の力を分散しないこと、学術的

な点で統一し医療の中に正しく位置づけること、誰もが平等にそのすぐれた研究報告の機会をもつこと、などであります。学会が結成されたいま、その内容の充実はまさに参加する人の力量にかかっていると申せましょう」と学術的な積み重ねこそが社会の評価を受けると、その重要性を説いた。

日本カイロ学会は4回ほど開かれ、学会雑誌も発行された。



熱気あふれる初の学会 There was a throb of enthusiasm at the first chiropractic research symposium in Nagoya, 1980



伊藤不二夫先生
Fujio Itoh, M.D.



藤井 尚治先生
Naoharu Fujii, M.D.



竹谷内一愿先生
Kazuyoshi Takeyachi, D.C.



金沢 明先生
Akira Kanazawa, M.D.



坂井 友吉先生
Tomokichi Sakai, M.D.

1983年より隔年で開催 JCAも学会の時代へ

JCA Starts Its Own Clinical Symposium on Chiropractic and Publishes The Japanese Journal of Chiropractic

The JCA started to have regular symposia on chiropractic research in 1983. The members have been instructed in research methodology, and have been encouraged to present their clinical data at the symposia. For each symposium, experts in research have been invited as special guest lecturers. After each symposium, all presentations have been published in the new Japanese Journal of Chiropractic Science.

カイロプラクティックの社会的認知には「教育」と「研究」が不可欠である。認定カイロプラクター養成のための全国的な系統教育が軌道に乗ると、次ぎなるステップとして認定者が臨床を通じて研究発表できる学会を開催しようとの機運が盛り上がった。未経験な学会に不安もあったが、あえて開催する意義は計り知れないものがあった。例えば、一般社会に対し、カイロの自助努力を示し、法制化の布石となる。会員に対し、知識、情報交換の場となる。演者には自らを高める最高のチャンスとなり、カイロ業界に対してはJCAの信用を高めることになる。カイロを学問として位置づけようとするJCAにとって、学会開催は夢であり挑戦であり、そして自信へとつながった。

学会は二年毎に開催されることになった。学会テーマは、社会向けに「明日のカイロプラクティックのための研究と実践」、会員向けには「経験的治療から実証治療へ」が選ばれた。特に会員の意識改革を重視、カイロプラクターとしての自立、受け身からの脱却、通信講座で学んだ学技の再確認、治療の客観化、蓄積された情報の交換をめざした。

学会で発表された研究は教育講演内容と共に日本カイロプラクティック学会雑誌として、定期発行されることになった。学会誌は、国会図書館の定期刊行物や日本科学技術情報センターに正式登録され、国内外のカイロや医学関係図書館にも無料贈呈され、日本のカイロ研究の貴重な発信源となった。



臨床カイロプラクティック学会学術大会

Clinical and Educational Symposia on Chiropractic in Alternative Years

回	月日(Dates)	会場(Locations)	教育講演講師(Guest Lecturers)
1	1983. 10.	東京・日本青年館	鳥山貞宜、佐藤昭夫、スエンソン
2	1985. 11. 23~24	東京・浅草ビューホテル	熊沢孝明、遠藤真弘、大西徳明
3	1987. 10. ~	京都・国立京都国際会館	ウインタースタイン、加瀬建造、塩川満章
4	1989. 11. 3~	石川・金沢市観光会館	トリアノ、山地啓司
5	1991. 11.	鹿児島市民文化ホール	アルナルド、フィリップス
6	1993. 11. 21~	北海道・ロイトン札幌	クレイハンス、鳥山貞宜、菊地臣一、塩川満章
7	1995. 9. 2~3	新横浜プリンスホテル	ウオルシュ、石川陽一、松田広則、バジェル、大道等

教育講演

第一回学術大会

1st Symposium



日本大学医学部整形外科教授 鳥山貞宜
Professor of Orthopedics
Sadayoshi Toriyama, M.D.
Nihon University



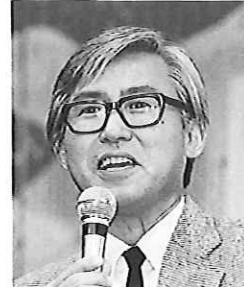
東京都老人総合研究所
生理部長 佐藤昭夫
Dr. Akio Sato
Director, Tokyo Metropolitan
Institute of Gerontology



ナショナルカイロプラクティック大学
助教授 ランド・スエンソン
Dr. Rand Swenson
Assistant Professor,
National College of Chiropractic

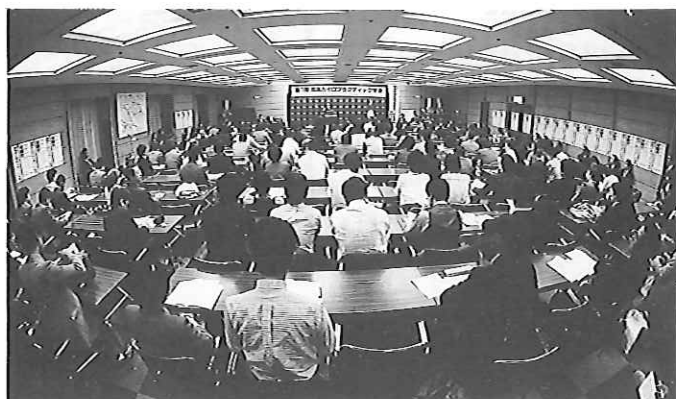
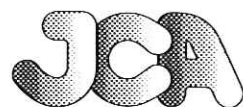
第二回学術大会

2nd Symposium



名古屋大学環境医学研究所
教授 熊沢孝明
Professor of Nagoya Univ.
Takaaki Kumazawa, M.D.

臨床カイロプラクティック学会／1st Clinical Symposium 日本青年館で初の学術大会 1983



JCA主催による第1回学術大会は予想を上回る盛会で11月19、20日の両日開かれた。当代一流の学者による教育講演、カイロプラクターによる18題の演題発表。全国8支部がくり広げた爆笑のパーティ披露、てきぱきと動いた役員たち。どれ一つとっても感動的なシーンばかりだった。プロに頼めば容易に開ける時代に、あえてカイロプラクターによる手作りの挑戦。それが自分たちもやればできるんだという自信につながって参加者に特別な感動を与えたようだ。老人研で1年間、研究を重ねたドクターズエンソンによる「脊柱ストレスが及ぼす自律神経反応」は内容の濃さに加え、JCA会員の協力で研究が実現した喜びも大きかった。世界のカイロ研究のエース誕生である。カイロプラクターの成熟を実感した感動的な学会であった。

臨床カイロプラクティック学会／2nd Clinical Symposium Tokyo 浅草ビューホテルで第2回学術大会 1985



「経験治療から実証治療」をテーマにした第2回学術大会が11月23、24日開かれ、3百名の参加者は熱心に学者の教育講演と15題のカイロ研究演題に聞き入った。2年前と比較して、研究内容、スライド制作に格段の進歩が見られ、最新の知識にふれ大いに満足した。

Guest lecturers



東京女子医科大学
助教授 遠藤真弘
Dr. Masahiro Endo
Tokyo Woman's Medical
College



労働科学研究所
労働生理主任 大西徳明
Tokuaki Ohnishi, B.S. PhD
Director Occupational Health
Institute of Science of Labor

第2回学術大会
11月23日(祭)・24日(日) 於東京・浅草ビューホテル

The 2nd Clinical Symposium on Chiropractic in Tokyo Nov. 23-24 '85

臨床カイロプラクティック学会

JCA

経験治療から実証治療へ
明日のカイロプラクティックを築く研究と実践

【教育講演】3題

- 「痛みと鎮痛」 熊沢孝朗 先生
- 「心臓外科の現状と将来」 遠藤真弘 先生
- 「現代作業における筋疲労」 大西徳明 先生

【研究演題】15題

- 中山 宏 頸椎部における疲労感又は痛みの発生に関する研究
- 川崎 崇一 足関節骨折によるカイロプラクティック治療の効果的検討
- 村上 佳弘 腰痛症に罹患すると思われる仙関節障害の統計調査
- 竹谷内一彦 変形性関節症と思われる70歳以上の腰痛性腰痛の発症及びカイロの治療効果
- 大塚 健徳 経路サブラクセーションに起因すると思われる腰痛100例の検討
- 佐々木義生 腰痛症200例における立位腰椎のレントゲン
- 富崎今佐次 慢性腰痛における筋緊張変化
- 山下 野雄 臨牀所と治療セッションの関係
- 羽谷 天道 腰痛症に対するカイロプラクティック治療の効果
- 森崎 勝治 経路部に異常あると思われる経路サブラクセーション
- 岩崎 幸夫 仙関節障害に関係すると思われる内臓疾患
- 木田 一男 後方肩サブラクセーションと筋力の関係について
- 角野 善則 カイロプラクティック治療が社会生活に及ぼす影響
- 中村 清晴 いわゆる腰痛について

【お楽しみ企画】 パーティ・展示・販売・その他多数

主催＝日本カイロプラクティック総連盟
後援＝ナショナルカイロプラクティック大学
後援＝(財)東京ストレス研究会
後援＝(株)科学新聞社

臨床カイロプラクティック学会／3rd Clinical Symposium Kyoto 国立京都国際会館で第3回学術大会 1987



第3回学術大会が、1987年10月10日から3日間開かれた。教育講演はナショナル・カイロプラクティック大学のウィンタースタイン学長による「カイロの原理とアジャストについて」。京都大学の佐藤公道教授による「カイロプラクターに必要な疼痛生理学の知識」の二題。一般演題は前田喜代治氏の「姿勢および愁訴分析による学童の実態報告」など13題。ワークショップには塩川満章D.C.、加瀬建造D.C.が参加した。

臨床カイロプラクティック学会／4th Clinical Symposium Kanazawa 金沢市で第4回学術大会 1989

1989年11月3～5日、金沢市観光会館で第4回学術大会が開かれた。実行委員長は松本清徳北陸支部長。教育講演は富山大学教育学部長、山地啓司教授による「体力と運動処方」、特別講演はナショナル・カイロプラクティック大学研究部長J. トリアノ教授による「頸部痛、腰痛に対するカイロ治療効果の証明」「特発性側弯症のマネージメント」の二題。一般講演はカイロ中央研究所、村上佳弘氏による「研究報告」。研究発表の一般演題は鎌田徹氏による「経時的傾向分析を中心とした来院患者の実態報告」を始め13題。分科会では、安藤喜夫氏による「腰痛に対する多角的アプローチ」が披露された。

ディナーパーティと宿泊は金沢国際ホテル。特別企画の加賀祇園コースを始め各種観光コースが用意され学会参加者は昼間の疲れを癒すため、それぞれ夜の金沢を満喫した。

金沢大会で始めて一般市民を対象にした健康フォーラムを実施。研究と並行し、健康をテーマにカイロのP.R.を試みた。(81頁参照)。

臨床カイロプラクティック学会 第4回学術大会

平成元年11月3日(金)～11月5日(日)

主催 臨床カイロプラクティック学会・日本カイロプラクティック総連盟
後援 金沢経済大学、北陸放送、北陸中日新聞社、金沢新聞社
協賛 金沢市観光協会、ナショナルカイロプラクティック大学



教育講演 第3回学術大会 3rd Symposium



J. ウィンタースタインNCC学長
Dr. J. Winterstein
President, National College
of Chiropractic



京都大学教授 佐藤公道
Professor, Kimihiro Satoh
Kyoto University

第4回学術大会 4th Symposium



J. トリアノ先生
John J. Triano, D.C.
Researcher, National
College of Chiropractic



富山大学教授 山地啓司
Professor Keiji Yamaji
Toyama University

臨床カイロプラクティック学会／5th Clinical Symposium Kagoshima 鹿児島で第5回学術大会 1991 JCA創立30周年記念パーティ開く

1991年11月2、3日の両日、第5回学術大会が開かれた。会場の鹿児島は雲一つない晴天。開会式には全国各地から210名の会員が集まり、R. フィリップス学長（ロサンゼルスカイロ大学）とL. アルナルド教授ら特別講師が紹介される頃には、雰囲気は盛り上がりを見せた。黒木大会委員長は「Dr. ジェンシーの等しくさしのべる愛の手のぬくもりを今でもはっきり思い出します。カイロは技術だけでなく、人づくりだとDr. ジェンシーは教えてくれました」と挨拶した。

アルナルド講師は「老人学と頭痛の治療」、フィリップス講師はアメリカでの研究最新成果を解説し、好評を博した。

学会発表は野田千尋氏の「交流分析より見た心身的愁訴の調査」ら8題。鹿児島学会はJCA創立30周年に当たり、会場のホテルでは盛大な祝賀パーティが繰り広げられ、役員の



ハッピーバースデー斉唱の中、大きなバースデーケーキにナイフが入れられJCA 30歳を全員で祝った。

臨床カイロプラクティック学会／6th Clinical Symposium Sapporo 札幌で第6回学術大会 1993 大学教授3名を招き、充実した講演と研究発表



札幌学会は臨床カイロ学会が発足してちょうど10年。節目を迎えた本学会はいろいろな意味で感慨深いものとなった。

札幌学会は北海道文化放送、北海道新聞社など多くの後援と、東洋カイロ、創術カイロ、日本カイロリサーチなど多くのカイロ団体の協賛を得て開かれた。カ

イロの有効性、安全性が問われる折、学会の重要性が次第に理解されるようになったのだろう。

札幌学会の特色として教育講演、研究内容の充実さを指摘できよう。特別講師のクレインハンス教授（RMIT）は「カイロの臨床診断への応用と統合的アプロ

ーチ」。日本人の教育講演は骨腫瘍研究の第1人で日本大学医学部整形外科・鳥山貞宜教授による「脊椎・骨盤の悪性腫瘍の診断と治療」。福島県立医科大学整形外科・菊地臣一教授による「腰痛に関する医学的常識の誤解」。参加者たちは背骨に関する重要な知識を、国内外の権威者から直接教わる感動を味わった。一般講演では、塩川満章DCが「TMJに対するアプローチ」を解説。研究発表は、村上佳弘氏の「生理学的応答を中心としたカイロの科学性」、鎌田徹氏の「カイロ領域から見た姿勢に関する考察」、中塚DCの「頸椎神経根症状に関するカイロアプローチ」など5題。今回は発表題数を少なくし、時間を増やして質疑時間を作ったのが好評だった。

第五回学術大会



前学長 L. アルナルド
Dr. L. Arnold
National College of
Chiropractic



学長 R. フィリップス
Dr. R. Phillips
President, Los Angeles
College of Chiropractic

第六回学術大会



日本大学医学部整形外科
教授 鳥山貞宜
Professor S. Toriyama
Nihon University
School of Medicine



福島県立医科大学
教授 菊地臣一
Professor S. Kikuchi
Fukushima
Medical College



RMIT 教授
A. クレインハンス
Professor A. Kleynhans
RMIT University

臨床カイロプラクティック学会／6th Clinical Symposium—Yokohama 横浜で第7回学術大会 1995 カイロ百周年を祝う



JCAの恒例になった臨床カイロプラクティック学会第7回学術大会が9月2、3日の2日間、新横浜プリンスホテルで開かれた。日本に現存し、唯一継続されている学会、しかもこの年はカイロプラクティックが誕生して百年目に当たる記念すべき年であった。

学会開催前の1時間は、カイロプラクティック百周年の祝賀を込め特別企画を行なった。音楽と映像を使用し、竹谷内一願顧問が世界と日本のカイロを回顧した。豪州大使館のホワイト参事官は、日本でのRMIT誕生の意義を語り、RMITのクレイハンス教授は、アジア、日本でのカイロの明るい展望を述べ、特別企画を終了した。

学会の開会式では小川繁蔵大会委員長、小川武久実行委員長、池田富士太科学新聞社社長が挨拶。司会の渡邊貴彦氏

より祝電披露、展示業者の紹介があり特別講演に移った。

最初の演者は豪州RMITのドクター・マックス・ウォルシュ。「カイロ研究の現状」のテーマで、近年の多数にのぼる研究成果がカイロの認識を高めるうえで大きな役割を果たしたこと、特に腰痛にそれが顕著で、頭痛も進んでいる。現在臨床試験を行なっている研究には、喘息、高血圧、月経困難、中耳炎、夜尿症などがある。経験に基づく効果は大切だが、科学的に裏付けられた研究成果はさらに説得力があることを強調した。

基礎部門では、東邦大学医学部講師・石川陽一先生の「情動と神経回路」、早稲田大学大学院・松田広則先生の「体性刺激に対する脳波の一考察」、立命館大学講師・ドクターブライアン・バジェルの「体性自律神経反射」、国際武道大

学・大道等先生の「スポーツにおけるバイオメカニクス」の4名が立ち、興味深い発表を行なった。

臨床部門の発表では青森の小林光則先生、東北支部の佐藤誠一先生、関東支部の小川繁蔵先生、東京支部の中村吉伸先生、近畿支部の倉津、山岸両先生、北陸支部の折橋直紀先生、九州支部の田岡剛先生ら8名の先生方が日頃の臨床に基づく研究成果を発表して関心を集めた。

百周年祝賀会開く

学会の初日夜、関東支部担当によるカイロ誕生百周年祝賀会が盛大に行なわれた。歌謡ショー、チャリティ・オークション、八木節披露などが祝賀会を盛り上げた。



日本カイロプラクティック徒手医学会が発足 1999 第1回学術講演会を開催

1995年の横浜学会から4年後、1999年にカイロ学会と国際科学シンポジウムの2つの学会が東京で開かれた。カイロ界は学術重視の新しい時代を迎えた。

カイロプラクティックの社会的地位を向上させ、学術的基盤を確立するため、「日本カイロプラクティック徒手医学会」が発足。10月10、11日に200名を集めて第1回学術講演会を千代田区の三井物産ビルで開いた。カイロプラクティックをテクニックだけでなく、その裏付けを確かなものにしようというもので、会則で

は会員資格を「本学会の目的に賛同し、カイロプラクティック医学に興味を有する者」と謳い、カイロプラクター、医師、歯科医師、一般人も参加できる間口の広い学会をめざす。学会長には、須藤清次DC、副会長には大場弘DCと国立木更津専門学校の太藤晃義教授の2名が選ばれた。

11月に開かれた最初の学会では「カイロプラクティック・シンポジウム1999」と題し、特別講演では檜学元島根医科大学学長が「脊柱側弯症と体平衡—神経

耳科学の立場から」、丸山剛郎大阪大学歯学部教授が「歯科医療とカイロプラクティックの連携」を講演。招待講演ではRMIT大学日本校の竹谷内宏明校長(JCA会長)、NCAの村松伸朗理事長が講演した。

ワークショップでは10題の研究発表が行なわれ、最後のパネルディスカッションでは「カイロプラクティックの教育基準」をテーマにJACの中塚祐文会長ら5名のパネリストが各側面からカイロプラクティック教育を論じた。



日本でカイロプラクティックに関する危険性を取り上げた初めての国際科学シンポジウムが1999年10月11日、昭和大学上條講堂で開かれた。会場には300名を越す参加者であふれ、このテーマへの関心の高さを示した。

テーマは「脊椎マニピュレーションの有用性と危険性」で、この分野の研究で著名な海外専門家4名が講演し、最後に各界代表の日本人パネラーによるディスカッションでしめくられた。シンポジウムの座長は世界的な自律神経学者でカイロプラクティックにも造詣が深い、佐藤明夫先生（昭和大学客員教授）が担当。

最初の講演はRMIT日本校研究部長ブライアン・バジエル講師による「脊椎マニピュレーションに対する生理学的反応」、2番目はデンマーク・オデンス大学研究所のシャトーレ・レブーフ女史の「脊椎マニピュレーションの副作用」、3

番目はオーストラリアRMIT大学のアラン・テレット助教授の「脊椎マニピュレーションの危険性」、4番目はノースウェスタン大学研究所のガート・ブランフォード講師の「脊椎マニピュレーションの有効性に関するコクラン・コラボレーションとメタ分析結果報告」。

講演は世界規模で、かつ最新データにあふれ、充実した内容で非常に説得力ある内容になった。詳細な講演記録はマニピュレーション誌増刊号として12月にエンタープライズ社から発刊される。

最後のパネル・ディスカッションの参加者は、医学側から福島県立医科大学の佐藤勝彦助教授と紺野慎一講師、法曹界からRMIT顧問の田村恵子弁護士、メディア側から医療ジャーナリスト・谷田伸治氏、カイロ側からJCAの村上佳弘理事長、村上カイロの橋本副学院長。それぞれ異なる立場からカイロプラクティック

主催

日本カイロプラクティック総連盟
日本カイロプラクターズ協会
RMIT大学日本校

後援

世界カイロプラクティック連合
アジア・カイロプラクティック連盟

の安全性、危険性さらには業界への期待など興味ある意見が出された。

従来業界で行なう多くの集会はテクニック中心のセミナーで、カイロの有効性ばかりが強調されてきた。しかし「人間の行なうことに完全はない」ように、カイロプラクターの行なう脊椎マニピュレーションも完全無害であるはずがない。しかも日本では海外と違い、教育不完全な未熟練者が少なくない。しかし危険性の実態は正確なところ誰もつかんでいない。今回海外の有効性と危険性の例が公開されたことの意義は大きい。

シンポジウムの前日、同じ会場で5名の講師を迎え、特別プログラムが午後行なわれた。

最初の講師は、JCAの竹谷内宏明会長による「JCA賠償保険17年間の記録」、2番目は安田火災海上の工藤孝二氏による「保険会社から見たカイロプラクティック」、3番目はRMITの村上佳弘教務主任による「脊椎マニピュレーションにともなう生理学的反応」、4番目はJACの中塚祐文会長による「カナダにおける治療事故例の一考察」、5番目は米ダートマス医科大学ランド・スエンソン助教授の「代替補補医療（CAM）時代におけるカイロの役割」。それぞれ興味を引くテーマを通し、参加者は今日的課題に関心を示した。

世界からトップの講師陣



昭和大学医学部客員教授
佐藤 昭夫



アラン・テレット
Dr. Allan Terrett
(オーストラリア)



シャレー・レブーフ
Dr. Charlotte Leboeuf-Yde
(デンマーク)



ブライアン・バジエル
Dr. Brian Budgell
(RMIT大学日本校)



ガート・ブランフォード
Dr. Gert Bronfort
(米国)



ランド・スエンソン
Dr. Rand Swenson
(米国)

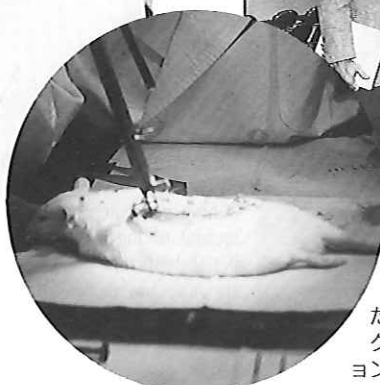
研究

基礎研究 日本が誇る体性・自律神経反射の世界的研究

Basic Science Research : Somato-Autonomic Reflex Study



カイロプラクティックの研究が本格化する契機となったのは、NIH（米国国立衛生研究所）が1975年に主催した「脊椎手技療法に関するワークショップ」であった。基礎、臨床、教育の分野の権威者が58名が国内外から招聘され、当時の手技療法に関する最高のワークショップとなった。日本からは自律神経の研究で世界的な業績を残す佐藤昭夫博士が招かれ、体性・交感神経反射とその生理学的、臨床的意義について最新研究成果を述べた。JCAの竹谷内一恵会長は、1977年頃ドクタージェンシーの紹介で佐藤昭夫先生と親交を深め、1980年には半年間、佐藤先生のもとで研究に従事することになり、1981年ナショナル大学でその成果を発表した。



ラットを使ったサブラクセーションの研究

竹谷内氏は臨床家の立場から、体性・自律神経反射をより限局し、脊椎・自律神経反射の研究をラットを用いて行ない、その予備的な研究成果「脊椎刺激による心臓反射」を1981年ナショナル・カイロ大学のホームカミングで発表した。ラットの脊椎（腰椎3・4番）を刺激してサブラクセーションを起こさせ、それを定量分析し、心拍数と血圧測定を記録するものであった。研究では脊椎と皮膚への刺激が最大の反応を示し、筋膜と筋肉は反応が少ないことを示した。



NIHのワークショップでの結論は、手技療法の科学的な研究は遅れており、その確実な効果を示すためにも本格的な研究が急務である、というものだった。当時カイロプラクティックの大学でも「研究」の授業はなく、業界ではこれを契機に本格的な研究とその支援に乗り出す。

カイロプラクティックの研究は幾つかの分野に的を絞ると分かり易い。基礎について云えば、(1)痛み (2)神経圧迫 (3)体性内臓反射 (4)サブラクセーションの種類と病態生理。臨床家が行なえる研究も決して少なくない。(1)調査（サーベイ）(2)疫学調査 (3)事実収集（データ）(4)テクニックの分析。

1980年代後半からカイロプラクティックにも本格的な研究の時代が到来した。

Research Relationships with Dr. Akio Sato (1976 – Present)

In 1975, when NIH held the first research conference on spinal manipulative therapy, there was one Japanese scientist among some sixty invited experts in basic and clinical sciences. His name was Dr. Akio Sato, and he was known as the leading expert in the study of somatoautonomic reflexes.

Dr. Joseph Janse, president of National College, was greatly impressed with Dr. Sato's presentation at NIH, and, on his advice, Dr. Kazuyoshi Takeyachi first got in touch with Dr. Sato in 1976. In 1978, the JCA raised funds for Dr. Sato's research. In 1980, Dr. Takeyachi did a pilot study on cardiac reflex responses to spinal manipulation in the rat, and presented this

work at the National College Homecoming in 1981.

In 1983, Dr. Janse sent a young scholar, Rand Swenson D.C., Ph.D. from National College. He spent a full year under Dr. Sato at Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology. Dr. Swenson did a great deal of research in somatoautonomic reflexes which was so pertinent to the basis of chiropractic. His works have been published in the scientific journals. In 1993, Dr. Brian Budgell, a CMCC graduate, was invited to Dr. A.Sato's lab and continued the studies on somatoautonomic reflexes. Both researches have been subsidized by FCER. Chiropractic profession owe Dr. Akio Sato for his generosity and cooperation.

Nov. 1982



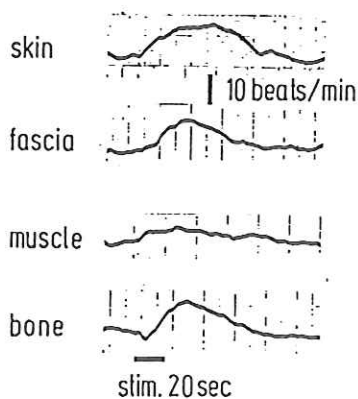
Dr. Joseph Janse paved the way for, Dr. Rand Swenson's research in Japan.

ジェンシー学長は老人研の研究室に佐藤博士を訪問し、ドクター・スエンソン(右)の研究来日実現に努力した。

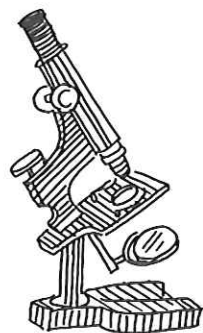


Dr. Swenson spent the year of 1983 at Dr. Sato's research lab. Later on he has completed his medical education. He is now an editor of a JNMS : Journal of the Neuromusculo-skeletal System published by the ACA and works for Department of Neurology, Dartmouth-Hitchcock Medical Center.

1983



1983年1月、ナショナル・カイロ大学からサバティカルをもらって R. スエンソン博士(同大助教授)が研究のため来日。東京都老人総合研究所・佐藤昭夫博士のもとで1年間研究に従事した。研究は「関節求心性神経刺激に対する自律神経反応」を初め多数の研究論文にまとめられ学術誌に発表された。この後、1984年、1985年の2回にわたり数週間来日して研究を継続。スエンソン博士の研究後継者として、1993年バジェルドCがカナダより来日。現在、FCERより研究助成を受け、カイロで扱う構造的な腰痛が椎間板ヘルニアの痛みに似ていることを証明する「座骨神経への血液量の体性自律神経反射制御」の研究に取り組んでいる。



May 1992



Mr. David Chapman-Smith paved the way for Dr. Budgell's research at Dr. Sato's lab.

1994



Dr. Brian Budgell is now conducting a research at Dr. Sato's Lab.

臨床研究 データーの積み重ねが成果につながる

Clinical Research

医学でもカイロでも、そのめざすところは臨床、教育、研究の三つである。JCAは研究発表の場として臨床カイロプラクティック学会と日本カイロ学会雑誌の二つをもっていたが、さらに1986年、日本カイロプラクティック中央研究所を設立して、地道な研究活動を行なうことになった。

カイロが発展するために必要な要素は、情熱と情報量（デー

タ）といえる。ある高名な教授が「学問の世界で一番強いのは真実である」と述べたが、カイロの有効性を冷静な目で追及し、世の評価に耐える多くの情報を、情熱を持って提供し続けることが最終的にカイロの理解を得るのに必要といえよう。日本はカイロの研究に決して恵まれた環境といえないが、発想と情熱があれば臨床家でも研究は可能ということを実証した。

1984



Dr. Arnold visits professor Noda at Tamagawa Univ

JCAは基礎医学的研究と並行して、臨床研究を重視。カイロの科学化を促進するために、1986年に「日本カイロプラクティック中央研究所」を創設。

活動の主なる目的は、

- (1)日本カイロプラクティック学会雑誌の発行
- (2)臨床カイロ学会の学術指導
- (3)研究員の海外派遣

(4)国内・外国研究機関、大学での共同研究

(5)外部の要請に対する学術的協力などである。

カイロプラクティックを正しく社会に啓蒙するためには、我々カイロプラクターがより良い臨床効果を上げる（治療実績）と同時に、研究機関と協力して正当性ある科学的データを様々な角度から社

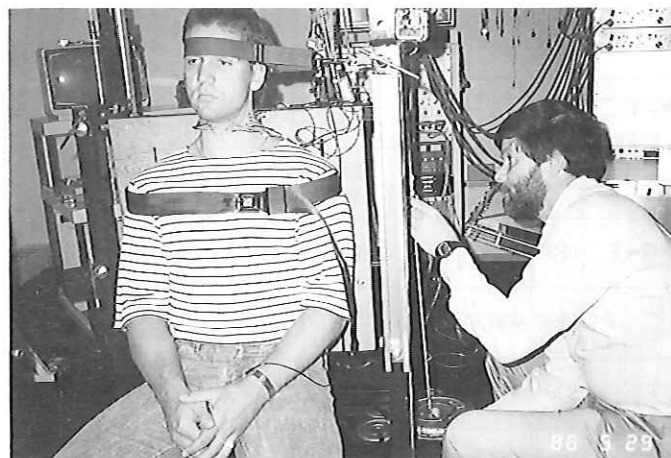
1986



Yoshihiro Murakami doing the clinical research

会に提示する必要がある。中央研究所は発足以来、労働科学研究所や玉川大学など外部研究機関と共同研究を行ない、研究成果を挙げている。1986年の研究テーマは「カイロ治療効果の客観的評価」で、(1)足底面圧分析の継続（玉川大学）、(2)サーモグラフィによる皮膚温度測定（労働科学研究所）(3)筋電図による分析。学会演者の研究指導も役割の一つ。

1986



村上佳弘氏はナショナルで研究に従事 Yoshihiro Murakami spent three weeks at National College taking part in research in 1986

世界的で進む、カイロプラクティックの研究

Scientific studies on Efficacy and Efficiency of Chiropractic Continue

1980年代より研究が本格化

突破口はAMAへの勝訴

カイロプラクティックの研究が本格化したのは、1975年の米NIH主催のワークショップがきっかけだった。世界の権威ある科学者や臨床家が集まった会議で判明したのは、カイロの有効性についてほとんど何も分かっていないということだった。カイロ業界は政治活動中心から、組織的に研究と取り組む決意をした。カイロの研究の遅れは、アメリカ医師会（AMA）がカイロ撲滅をめざして医学研究者、医師とカイロプラクターとの共同研究を禁じていたことも大きかった。カイロ側がAMAを提訴した独占禁止法違反裁判が11年間の法廷闘争を経て、最高裁で決着したのが1990年。AMAの全面敗訴によって、カイロプラクターは医学研究者との共同作業が可能になった。その成果は米国、カナダですぐに表われた。ランド研究、マンガ・レポート、腰痛ガイドラインなど権威ある研究機関で、次々に脊椎マニピュレーションの効果が認められた。米国政府ヘルスケア政策局政策の発表は日本でも新聞で報道され、腰痛ガイドラインは日本語に訳された。



「カイロの危険な手技」に根拠がないことが判明 三浦レポートの疑問

厚生省はカイロプラクティックに対する正式な見解を、1991年に提出された整形外科医グループ（通称「三浦レポート」）のレポートを根拠にしている。それに基づいて全国各都道府県衛生担当部長宛に「医薬類似行為に対する取り扱いについて」を通知した。三浦レポートの提言の中の「危険な手技の禁止」では「頸椎に対する急激な回旋伸展操作を加えるスラスト法は、患者の身体に損傷を加える危険が大きいので行なうべきではない」とした。一貫して具体性に欠ける内容や参考文献がないことから、このレポートの信ぴょう性は当初から疑われていた。

1999年、「この危険な手技」についての研究結果が国際的な学術誌スパイン（脊椎）に掲載された。それによると、どのような頸椎の位置または回転、あるいは頸椎の手技（マニピュレーション）も、椎骨脳底動脈損傷（CVA）の危険性を高める証明は得られなかった。さらにデンマークのオデンス大学の学術的な研究報告は次の興味ある事実を報告する。頸椎を回旋伸展させ、めまいや椎骨脳底動脈障害を起こさせようとしても、例えそれが陽性であっても、心配される椎骨動脈の血流には全く影響がないことが判明した、というのである。このような科学的研究は、三浦レポートが科学的根拠に基づかないことを明らかにしている。

各国権威機関によるこれまでのカイロプラクティックに関する調査研究と結果

研究調査名	年度	当事国	報告書名・研究機関	研究責任者・共同研究者	有効性
ニュージーランドレポート	1979	ニュージーランド	ニュージーランドレポート・カイロプラクティック調査委員会	委員長：イングリッド・弁護士、大学法学部教授 委員：フレイザー・女史・女子大学学長退職／ベンフォード・大学化学教授	認める
	1984	オーストラリア厚生省	メディケア受益検討委員会	ニュージーランドレポートを参考	認める
	1987	スウェーデン	代替医療に関する報告書 代替医療委員会	政府、教育者の代表 医師、カイロプラクター各1名	認める
三浦レポート	1991	日本・厚生省	脊椎原性疾患の施術に関する医学的研究同研究班	主任研究者：三浦幸雄・東京医大整形外科教授 研究協力者：石田肇他7名の整形外科医	認めず
ランド研究1)	1991	米国	腰痛に対する脊椎マニピュレーションの適応性（有効・禁忌）。ランド研究所・健康科学部門。	主任研究員：シェリキー・大学教員、内科医 医師6名・カイロプラクター3名、計9名	認める
マンガレポート	1993	カナダ・オンタリオ州政	腰痛のカイロプラクティック・マネージメント	調査主任：マンガ・大学教授、健康経済学者 他3名 業者は除外	認める
ピングハムレポート2)	1993	英国王室基金	カイロプラクティックに関するワーキング・パーティーの報告書	カイロプラクティック特別調査委員会 医療補完専門職委員会の見解を求めた	認める
腰痛ガイドライン3)	1994	米国連邦政府	成人における急性腰痛の諸問題 米国連邦政府ヘルスケア対策研究局	座長：ピゴス整形外科医他23名のパネル委員 カイロプラクター2名参加	認める
腰痛ガイドライン	1995	英国政府	腰痛に関する臨床業務ガイドライン 臨床スタンダード委員会	臨床スタンダード委員会：10名中カイロプラクター1名参加 米国AHCPR4)と協力で作成	認める